

必然性があり意欲が高まる学習課題の設定と 解決への見通しをもたせる工夫

◇ 学習課題設定のポイント…

「与える」から「引き出す」へ

「今日のめあては〇〇です。わかりましたか？それでは自分で考えて」…
このような導入で、教師の「教えたこと」を子どもの「学びたいこと」に変えることができるでしょうか？ 思考力・判断力・表現力等の育成には子どもの主体的な姿勢が重要なポイントになります。そのためには、教師の一方的な課題提示ではなく、子どもの「問い」を引き出し、学習課題につなげていくことが必要です。

学習課題に求められる要件

- 子どもの実態に即している。
- 課題解決への必然性がある。
- 適切な難易度で、解決の見通しをもつことができる。
- 身近な素材やことがらである。
- 学習への興味・関心を高めることができる。
- 多様な見方や考え方を引き出すことができる。

「問い」を引き出す課題設定の工夫

- ・「実物」を通して
- ・「実演」を通して
- ・「対話」を通して

子どもと教材との出会いを大切にして、「問い」や「思い・願い」を引き出しましょう。



「問い」を課題へ

<資料や課題の提示例>

- 資料を少しずつ見せる。一部を隠して見せる。
 - 複数の資料を比較(対比)させる。
 - 事象(現象)の理由を考えさせる。
 - ブラックボックスによる提示や結果一覧から決まりを見いださせる。
 - 既習から未習へ移ることでギャップを感じさせる。
- できる→できる→あれ？
- 分類したり類別したりする活動から特徴を見つける。
 - 条件を加えたり、制限したりして負荷をあたえる。

- 「ということは、みんなが調べたいことは…？」
- 「ということは、今日は何を考える必要がありますか？」
- 「みんなの疑問を整理すると□□ということになるけどどうか？」
- 「Aさんの疑問いいですね。それをみんなの課題にしようか？」



本時の学習課題・めあて

- 教師による学習課題設定だったとしても…

子どもから「問い」を引き出し、学習課題につなげることが難しいことがあるかもしれません。また、技能教科において、「～しよう」という行動目標になることもあると思います。発問を工夫することで、**学習課題を学習の主体者である子どもたちのものとして意識させる**ようにすることが大事です。

「前の時間に課題として残っていたことを思い出してみましょう。」

「学級として〇〇というめあてに取り組みたいのですが、どのように学習していけばいいでしょうか。」

「では、どんなことに気を付けて学習するかを考えてみましょう。」



◇ 課題解決の見通しをもたせましょう


- 子どもにめあてを把握させる。【ゴールの確認】
 - ・ 「授業で行き着こうとするところ」をはっきりと意識させましょう。
- めあてを達成するためにどうすればよいかの見通しをもたせる。【方法の確認】
 - 解決方法 □答えの見当 □調べる視点 □学習の道筋
 - ・ 何も与えず考えさせる→既習事項や経験を思い出させる→直接ヒントを与えるなど、子どもの状況によって対応を考えましょう。
- すべての子どもが見通しをもっているか見取る場面を設定する。
 - ・ ペアでめあてを確認したり、ネームカードで解決方法を選択させたり工夫しましょう。
- 子どもの多様な発言に対応できる準備を行う。
 - ・ 子どもの反応を数多く予想することで柔軟に対応でき、子どもの主体性を引き出せます。

その学習課題、ちょっとした工夫で変わります！

◇ 子どもから問いを引き出し、解決の必要感から設定した課題

<小学校1年 算数「たしざん」>

問題 たまごは あわせて なんこですか



本時の目標が、「 $4 + 8$ の計算の仕方を考えることを通して、被加数を分解して計算する方法について理解する。」である時、下の2つの学習課題のうち、児童の学習意欲を喚起し、しかも本時の目標に直結する学習活動が予想されるのはどちらでしょうか。

- A 「 $4 + 8$ の計算のしかたを考えよう」
 B 「どちらに10のまとまりをつくらうかな」

どちらを10にしようかな。

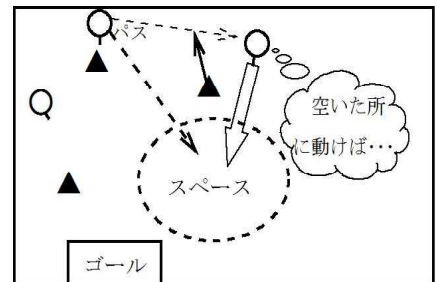


算数においてBのような学習課題を作るには、教科書のキャラクターのつぶやきが参考になります。

Aは、どのような四則演算でもよく見られる学習課題です。しかし、本時では、Bを問うことによって既習と異なる方法があることに気付かせることができ、ねらいに直結する学習活動が期待できます。

<小学校5年 体育「ゴール型ゲーム」>

- T 前の時間のパスはどうだった？
 C パスをすると相手にとられた。
 C あまりボールをもらえなくて、ゲームにならなかった
 T パスをもらう側はどんな工夫をすればいいかな？



そこで、学習課題を「うまくパスがもらえるには、どこに動けばよいだろうか。」と設定します。例えば、「パスのもらい方を工夫してゲームをしよう」と教師が一方的に提示するよりも、学習内容（空いた場所に素早く動くこと）について主体的に思考させ運動させることができます。

技能を中心とした教科であっても、工夫することで子どもの問いを引き出して必然性のある課題を設定することができます。

<中学校1年 数学「正負の数」>

問題 バスケットボール部員8人の身長を、いろいろな方法で求めてみましょう。

A : 153 cm B : 148 cm C : 152 cm D : 155 cm
 E : 150 cm F : 159 cm G : 147 cm H : 152 cm

問題をそのまま課題にしていまいでしょうか。問題と課題は区別して提示したいものです。

上のような問題を受け、最初に小学校で学んだ身長の合計を人数で割る方法で答えを出します。その後、Aのような課題を設定する場合と、さらに小学校で行った「仮の平均」を定めて計算する方法があることを振り返り、Bのような課題につなげる場合があります。

- A 「もっと簡単に求める方法を考えよう」
 B 「どのように仮の平均を設定すると簡単に求められるだろうか」

Aは、漠然としていて、生徒自身がどのような学習をすればよいかととらえにくい課題です。それに対してBの課題は、仮の平均をどのように設定すればよいかを学習することが課題の中に示されています。また「仮の平均を最大値と最小値の間に設定することで正負の数が活用でき、簡単に求めることができる」というまとめとの整合性がとれる課題となっています。

「～について考えよう」の課題から脱却し、「なぜ～」
 「どのように～」など、子どもの問いのある課題を設定しましょう。
 何を考えるか学習内容を示唆する課題を設定することが大切です。